

小学校音楽科教科書における絵譜の取り扱いに関する研究

——《きらきらぼし》を題材に——

教育学科 臼井奈緒

抄 録

絵譜は、日本の音楽教育の歴史において読譜指導を補う教材として、独自の変貌を遂げながら使用されてきたが、昨今はほとんど目にすることがない。そこで本稿では小学校音楽科教科書に掲載された《きらきらぼし》の題材に焦点を当て、21種類の絵譜を横断的に比較・分析を行い、絵譜の隆盛と衰退の要因を探った。そこからは、①各社それぞれに独自性や類似性のある絵譜描出の創意工夫があったこと、②五線譜に準ずる機能性を一つでも多く絵譜に盛り込もうとする姿勢、③絵譜と五線譜の折衷過程、④絵画性より機能性を向上させることが最優先事項であったということ、⑤絵譜の絵画性の欠如は挿絵によって補完され、紙面全体の絵画性が担保されていたことが明らかとなった。

Key Words：絵譜、音楽科教科書

1 研究の背景と目的

絵譜は、日本の音楽教育の歴史において読譜指導を補う教材として使用されてきた。絵譜とは「未分化の児童に対して、楽譜にかわるものを文字や図形等で表現し、音高やリズム楽器の演奏などを感覚的にわからせようとする試み」（桜井1961）であり、桜井は絵譜の取り扱いの前提を「絵譜は読譜指導の前提として、階名素読の段階（読譜への準備）から階名視唱への発展をはかり、音高感覚の育成を助けるものであり、理解を深め、学習への興味をおこさせ、意欲を高めながら本譜視唱への素地を培うものである」（桜井1961）と述べている。

1947年刊行の小学校音楽科国定教科書に初めて掲載された絵譜は、その後、民間編集による検定教科書にも引き継がれ、日本独自の変貌を

遂げている。1947年刊行の小学校学習指導要領音楽編（試案）の中では、絵譜は「音楽絵画」という名称で扱われ、1958年刊行の小学校学習指導要領以降、絵譜という名称が使用されている。

日本の教育界で初めて使用された絵譜のモデルとなったのは、ドイツのヘリベルト・グリューガー（Heribert Gröger, 1900-1999）とヨハネス・グリューガー（Johannes Gröger, 1906-1992）の兄弟が1927年に考案した歌曲集 *Liederfibel* [歌の入門書] に掲載された絵譜であったことが確認されている（臼井・高見2017）。その絵譜の特徴は長谷川（2014）の分類⁽¹⁾によると、「挿絵の役割を持っているが、旋律の高低が表されているもの。階名や歌詞が書かれているものも含むが、五線のように本譜を連想するものは含まない」挿絵高低譜に位置

づけられる。五線譜を想起させることなく、絵譜そのものを絵画や絵本のように鑑賞できる絵画性の高さが、グリュエーの絵譜や挿絵高低譜の特徴であるといえよう。しかし現在は、ほとんど目にすることがなくなり、過去の教材として風化しているのが現状である。

長谷川 (2014) は、『『絵譜』が使用されなくなってきた理由は、五線譜への移行にこだわりすぎたことにありと考える』(p.63) と述べている。その結果、「現在の絵譜の取り上げ方は、単に五線譜を読む訓練のための段階的な道具になっており、音楽的な活動のための教材としては意味をなしていない。このため発展性がなかった」(pp.63-64) と分析している。

このような絵譜をめぐる背景において、本稿では小学校音楽教科書に掲載された《きらきらぼし》の題材に焦点を当て、絵譜の隆盛と衰退の要因を探りたいと考えた。当時の多くの音楽教育家や指導者によって工夫、改良され、様々な形態へと変遷を遂げた絵譜を、ひとつの曲を切り口として概観することで、絵譜の特徴を明らかにし、新たな活用に向けての手がかりを得ることを本研究の目的とする。

2 研究の方法

本稿では、公益社団法人教科書研究センターの附属図書館である「教科書図書館」に所蔵されている19の出版社の小学校音楽教科書に掲載された《きらきらぼし》の題材に焦点を当て、21種類の絵譜を横断的に比較・分析を行った。なお、教科書によっては《おほしさま》《きらきらおほし》《きらきら ほしよ》といった《きらきらぼし》とは別のタイトルで表記されているが、曲が同一であるものをすべて研究対象に含む。

絵譜の【機能性】を測る指標として①「五線」②「リズム」③「音価」④「音高」⑤「拍子・拍感」⑥「階名」表記の有無を、また、絵

譜の【絵画性】を測る指標として①「絵譜に使用されている色数」②「紙面に占める絵譜の割合」③「紙面に占める挿絵の割合」④「歌詞と絵譜のモチーフとの整合性」⑤「絵譜または挿絵による歌の世界観の描写」を手がかりとした。【機能性】①から⑤については該当する絵譜が項目を満たしている場合は○、満たしていない場合は×または△とし、⑥には階名表記の有無を示した。

【絵画性】の項目①については目視で絵譜に使用されている色数を数え、②③についてはペイントソフトを使用し、画像の挿絵、絵譜の箇所を選択し、おおよその紙面に占める割合をそれぞれ抽出した。④は歌詞の内容と、絵譜に用いられているモチーフとの意味的な整合性が見られる場合は○、整合性が見られない場合は×または△とした。また、【絵譜の類別】は長谷川の分類に基づき、その分類名称を使用する。

3 結果と考察

出版年度の古い順に分析・考察を行う。

3.1 〈昭和20年代の絵譜〉

3.1.1 《おほしさま》

【絵譜の類別】五線絵譜

【機能性】

①五線：○

②リズム：○

③音価：○

④音高：○

⑤拍子・拍感：○

⑥階名：無

【絵画性】

①色数：7色

②絵譜：14%

③挿絵：65%

④整合性：○

⑤挿絵◎ 絵譜△

世界観は挿絵にほぼ依存

図1は昭和25年に春陽堂教育出版から出版された「新訂あたらしいおながく1ねん」に掲載されている五線絵譜である。メルヘン調のイラストが絵本のような印象を与えている。

この絵譜の絵画性は紙幅の約65%を占める色鮮やかな挿絵によって担保されている。ページ左上に3段組で記されている五線絵譜は、音符

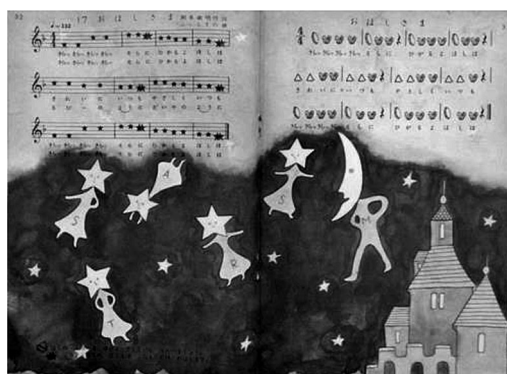


図1：春陽堂教育出版《おほしさま》
S25「新訂あたらしいおながく1ねん」

を示す★のモチーフによって描かれているが、その形態からほぼ五線譜としての使用を企図したものであり、絵譜自体の絵画性は乏しいといえる。右上には合奏指導のために楽器のイラストが示された絵譜も掲載されており、絵譜の多用されたページである。

3.1.2 《きらきらぼし》

【絵譜の類別】挿絵高低譜

【機能性】

①五線：×

②リズム：○

③音価：○

④音高：△

⑤拍子・拍感：○

⑥階名：無

【絵画性】

①色数：4色

②絵譜：27%

③挿絵：25%

④整合性：○

⑤：挿絵・絵譜の相乗

効果◎



図2：日本書籍株式会社《きらきらぼし》
S27「しょうがくおながく1ねん」

グリュウガーの作風と同じ分類の挿絵高低譜で、電柱として描かれた小節線は絵の中に溶け

込んでいる。その緩やかに区切られた小節の中に★のモチーフを規則的に配置することで、拍子や休符が自然に描かれている。左ページの絵譜と右ページの挿絵は独立しており、その両方が曲の持つ雰囲気とマッチしている。

3.1.3 《きらきらおほし》

【絵譜の類別】挿絵高低譜

【機能性】

①五線：×

②リズム：△

③音価：△

④音高：△

⑤拍子・拍感：○

⑥階名：無

【絵画性】

①色数：3色

②絵譜：74%

③挿絵：0%

④整合性：○

⑤挿絵・絵譜一体型

世界観の描写◎



図3：教育芸術社《きらきらおほし》
S27「一ねんせいのおながく」

挿絵と絵譜の区別はなく、ページ全体で絵譜としての体裁を保持し、高い絵画性により曲の雰囲気を描出している。ごく僅かだが1拍目・2拍目の★のモチーフの大きさが異なっており、拍感の意識を促す意図が見受けられる。

3.1.4 《おほしさま》

【絵譜の類別】五線絵譜

【機能性】

①五線：○

②リズム：△

③音価：△

④音高：○

⑤拍子・拍感：○

⑥階名：無

【絵画性】

①色数：6色

②絵譜：83%

③挿絵：0%

④整合性：○

⑤挿絵・絵譜一体型

五線が世界観を阻害

図3と酷似しているが、五線が図中にはつき

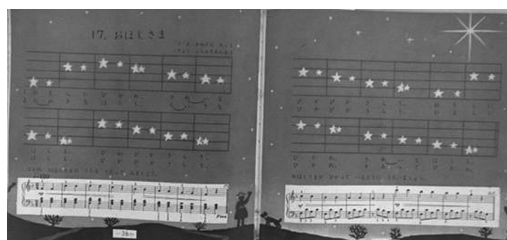


図4：教育出版《おほしさま》
S28「小学生の音楽1」

りと描かれているため、五線絵譜に分類される。1拍目・2拍目の★の大きさの違いは、図3よりもはっきりと見ることができる。また4, 8, 12, 16, 20小節の★の配置にも、拍感や休符を表そうとする意図が伺える。夜空の風景に不釣り合いな赤い五線がくっきりと記されたことで、絵画性が損なわれている。

3.1.5 《おほしさま》

【絵譜の類別】挿絵高低譜

【機能性】	【絵画性】
①五線：×	①色数：4色
②リズム：△	②絵譜：86%
③音価：△	③挿絵：0%
④音高：△	④整合性：○
⑤拍子・拍感：○	⑤挿絵・絵譜一体型
⑥階名：無	色調への配慮○

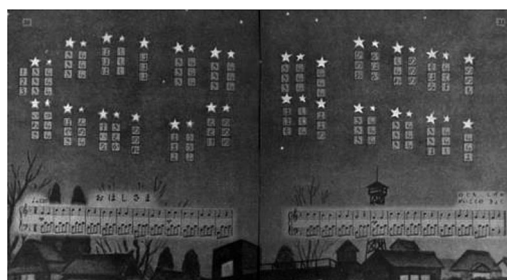


図5：大阪書籍《おほしさま》
S28「よいこのおながく1ねん」

図5は昭和28年に出版された大阪書籍「よいこのおながく1ねん」に掲載された《おほしさま》である。

図3と同様の挿絵高低譜だが、図中のピアノ伴奏譜の背景も青く着色することで、絵の中で悪目立ちしない工夫がなされている。また、3番までの歌詞が□の枠に囲われて記されているため、歌詞唱を重視し作成された絵譜であるといえよう。

ここまでの昭和20年代の絵譜を概観すると、図1、図2はそれぞれ個性的な描写がなされているが、図3～5は、雰囲気、色調、構成等が類似していることが見てとれる。しかしながら、教科書ごとに絵譜の描写で力点を置くポイントが異なっていることが確認できる。

3.2 〈昭和30年代の絵譜〉

3.2.1 《きらきらおほし》

【絵譜の類別】挿絵高低譜

【機能性】	【絵画性】
①五線：×	①色数：8色
②リズム：△	②絵譜：81%
③音価：△	③挿絵：0%
④音高：△	④整合性：○
⑤拍子・拍感：○	⑤挿絵・絵譜一体型
⑥階名：無	世界観の描写◎



図6：教育芸術社《きらきらおほし》
S30「おながく1」

図6は昭和30年に出版された教育芸術社「おながく1」に掲載された《きらきらおほし》である。濃い色合いで夜空を描いた図3～5と比較すると、全体的に淡い色調で描かれた挿絵高低譜である。伴奏譜、歌詞を除いてその他の情報が一切なく、絵譜が紙面に占める割合は81%と

大きいことから、絵譜を重視した体裁である。

3.2.2 《おほしさま》

【絵譜の類別】 五線絵譜

【機能性】

①五線：○

②リズム：○

③音価：○

④音高：○

⑤拍子・拍感：○

⑥階名：無

【絵画性】

①色数：3色

②絵譜：30%

③挿絵：15%

④整合性：○

⑤挿絵× 絵譜△

世界観への配慮△

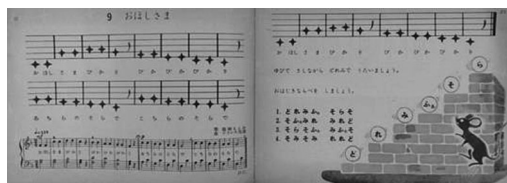


図7：全音出版《おほしさま》
S30「一ねんせいのおんがく」

図7は昭和30年に出版された全音出版「一ねんせいのおんがく」に掲載された《おほしさま》である。全体的に色調をおさえた五線絵譜であり、挿絵は曲とは無関係のネズミと煉瓦による音階の図が掲載されている。他の絵譜作品と比較すると、曲の世界観の描写が最も乏しく、絵譜としてのクオリティーは低い印象を受ける。

3.2.3 《きらきらおほし》

【絵譜の類別】 かな絵譜

【機能性】

①五線：○

②リズム：△

③音価：△

④音高：○

⑤拍子・拍感：△

⑥階名：無

【絵画性】

①色数：7色

②絵譜：81%

③挿絵：81%

④整合性：○

⑤挿絵・絵譜の相乗

効果○

図8は昭和30年に出版された音楽之友社「新訂しょうがくせいのおんがく1」に掲載された

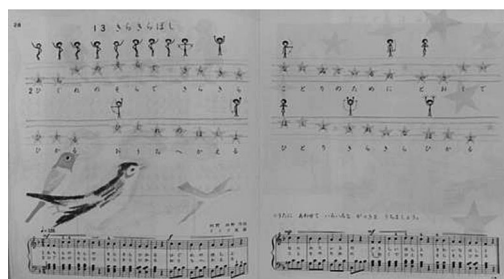


図8：音楽之友社《きらきらおほし》
S30「新訂しょうがくせいのおんがく1」

《きらきらおほし》である。全体的に淡い色調で、2番の歌詞に出てくることりが大きく挿絵として描かれている。★のモチーフの中に歌詞が書かれた、絵譜と挿絵の融合したかな絵譜である。絵の一部として溶け込むように、フリーハンドで引かれたカラフルな五線にも、絵画性を損なわない配慮が見受けられる。絵譜の上部には身体表現を図示したイラストが掲載されている。

3.2.4 《おほしさま》

【絵譜の類別】 五線絵譜

【機能性】

①五線：○

②リズム：△

③音価：△

④音高：○

⑤拍子・拍感：○

⑥階名：無

【絵画性】

①色数：6色

②絵譜：83%

③挿絵：0%

④整合性：○

⑤挿絵・絵譜一体型

色調への配慮○

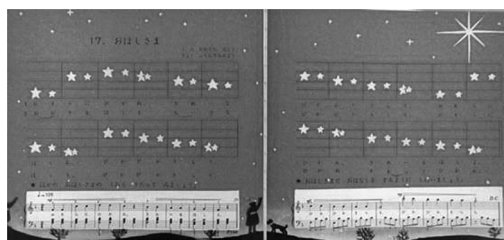


図9：教育出版《おほしさま》
S31「改訂しょうがくせいのおんがく1」

図9は昭和31年に出版された教育出版「改訂しょうがくせいのおながく1」に掲載された《おほしさま》である。同一出版社の図4の五線絵譜とほぼ同じだが、図中の五線の色を背景になじむ青色へと変更していることから、五線が悪目立ちせず、絵としての美しさへの配慮が見受けられる。

3.2.5 《きらきらほしよ》

【絵譜の類別】 五線絵譜

【機能性】

【絵画性】

- | | |
|----------|-------------|
| ①五線：○ | ①色数：4色 |
| ②リズム：○ | ②絵譜：31% |
| ③音価：○ | ③挿絵：23% |
| ④音高：○ | ④整合性：△ |
| ⑤拍子・拍感：○ | ⑤挿絵○ 絵譜△ |
| ⑥階名：有 | 世界観は挿絵にほぼ依存 |



図10：東京書籍《きらきらほしよ》
S33「あたらしいしょうがくおながく」

図10は昭和33年に出版された東京書籍「あたらしいしょうがくおながく」に掲載された《きらきらほしよ》である。五線絵譜（左ページ）と挿絵（中央・右下）、合奏用絵譜（中央下）がそれぞれ独立して掲載されている。五線絵譜では主要和音Ⅰ（ド・ミ・ソ）の音のみ、それぞれ異なる色で着色されており、音楽的要素の指導意図が感じられる。

2, 4, 6, 8, 10, 12小節の休符を示す★のモチーフと、音符の淡い着色方法を除いて、ほぼ絵譜自体に絵画性は見られない。

3.2.6 《おほしさま》

【絵譜の類別】 五線絵譜

【機能性】

【絵画性】

- | | |
|--------|---------|
| ①五線：○ | ①色数：4色 |
| ②リズム：△ | ②絵譜：51% |
| ③音価：△ | ③挿絵：0% |



図11：教育出版《おほしさま》
S33「総合しょうがくせいのおながく1」

- | | |
|----------|-----------|
| ④音高：○ | ④整合性：○ |
| ⑤拍子・拍感：△ | ⑤挿絵・絵譜一体型 |
| ⑥階名：無 | 世界観の描写◎ |

図11は昭和33年に出版された教育出版「総合しょうがくせいのおながく1」に掲載された《おほしさま》である。ここでは冒頭4小節のみを絵譜で表した絵譜の部分的使用が初めて見られる。図中の五線は電線のようにも見え、違和感なく絵の中に溶け込んでおり、柔らかく色数の少ない静謐な歌の世界観がよく描写されている。

3.2.7 《きらきらぼし》

【絵譜の類別】 白抜き一段階名譜

【機能性】

【絵画性】

- | | |
|----------|----------|
| ①五線：× | ①色数：14色 |
| ②リズム：○ | ②絵譜：14% |
| ③音価：○ | ③挿絵：22% |
| ④音高：△ | ④整合性：○ |
| ⑤拍子・拍感：○ | ⑤挿絵◎ 絵譜○ |

⑥階名：有 情報過多で世界観阻害

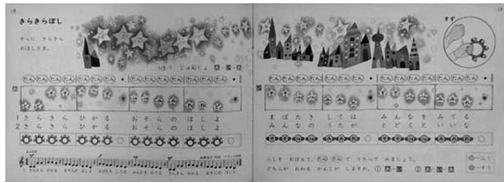


図12：東京書籍《きらきらぼし》
S33「新編あたらしいおながく1」

図12は昭和33年に出版された東京書籍「新編あたらしいおながく1」に掲載された《きらきらぼし》である。「絵または白抜き丸の中に階名が書かれている」絵譜として分類される白抜き一段階名譜で描かれた絵譜は、小節を示す枠で囲われている。しかし挿絵と繋がりを持たせた色調で完全に独立してはならず、絵画的である。ページに使用されている色数、掲載されている情報量が多く、やや雑多な印象を受ける。

3.2.8 《きらきらぼし》

ここでは二葉株式会社から昭和34年に出版された「音楽1年」と、昭和35年に出版された「おながく1年」に掲載された《きらきらぼし》の絵譜を比較検討する。

【絵譜の類別】 類別不明

【機能性】	【絵画性】
①五線：×	①色数：5色
②リズム：○	②絵譜：80%
③音価：○	③挿絵：80%
④音高：△	④整合性：×
⑤拍子・拍感：○	⑤挿絵◎ 絵譜×
⑥階名：有	絵画性は挿絵に依存



図13：二葉株式会社《きらきらぼし》
S34「音楽1年」



図14：二葉株式会社《きらきらぼし》
S35「おながく1年」

図13・14ともにサイコロのモチーフで示された絵譜と、山の稜線を描写した挿絵は旋律の形状の描写において関連性をもたせている。しかし絵譜自体には、歌詞と絵譜のモチーフとの整合性は見られない。サイコロの左側面には歌詞、右側面には階名が記されている。また、「かな絵譜」と「白抜き一段階名譜」の特徴を併せ持つため、絵譜の分類は断定できない。図14では図13には見られない旋律線が加筆されており、双方とも冒頭8小節のみの絵譜の部分的使用の一例である。

3.2.9 《きらきらぼしよ》

【絵譜の類別】 白抜き一段階名譜

【機能性】	【絵画性】
①五線：×	①色数：8色
②リズム：△	②絵譜：54%
③音価：△	③挿絵：54%
④音高：△	④整合性：△
⑤拍子・拍感：△	⑤挿絵・絵譜一体型
⑥階名：有	世界観はかろうじて保持

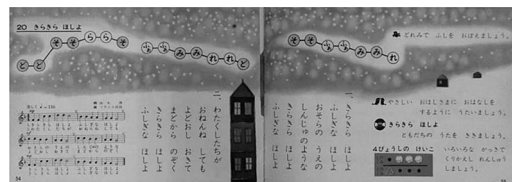


図15：東京書籍《きらきらぼしよ》
S35「あたらしいおながく1」

図15は昭和35年に出版された東京書籍「あたらしいおながく1」に掲載された《きらきらぼしよ》である。白抜き一段階名譜の絵譜を星座

に見立て、図中に配置しているが、絵譜自体の絵画性は乏しいといえる。しかしながら、歌詞に「しんじゅのようなきらきらほしよ」とあるため、○の形状で星のモチーフを示しているとも考えられるため、歌詞と絵譜のモチーフとの整合性は△と判断した。

3.3 音楽教育図書の《おほしさま》

ここでは昭和35年、39年、42年に二葉株式会社から出版された「統合版たのしいおんがく1」に掲載された《おほしさま》の絵譜を比較検討する。

【絵譜の類別】 白抜き一段階名譜

【機能性】

【絵画性】

- | | |
|----------|---------------|
| ①五線：○ | ①色数：3色 |
| ②リズム：○ | ②絵譜：11% |
| ③音価：○ | ③挿絵：30% |
| ④音高：○ | ④整合性：○ |
| ⑤拍子・拍感：○ | ⑤挿絵◎ 絵譜5～8小節△ |
| ⑥階名：有 | 1～4小節・9～12小節× |

1～4小節、9～12小節は音符の形状に近い白抜き一段階名譜で、5～8小節は歌詞との整合性を保持した★型の白抜き一段階名譜で描かれている。絵譜と挿絵は完全に分離しており、ほぼ普通の五線譜の様相を呈している。図16～18は挿絵の変更によりページ全体の雰囲気は変化しているが、記載内容はほぼ踏襲され、大幅な変更は見られない。図17、18の7～8小節ではデューナミクを五線の幅を狭くすることで視覚化している。

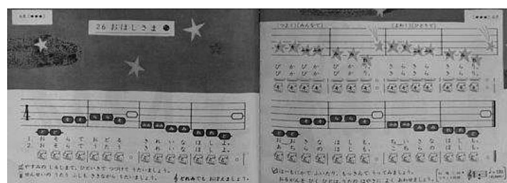


図16：S35「統合版たのしいおんがく1」



図17：S39「統合版たのしいおんがく1」



図18：S42「統合版たのしいおんがく1」

3.4 音楽之友社の《きらきらぼし》

ここでは昭和42年、50年、52年に音楽之友社から出版された「新訂おんがく1ねん」「改訂新版しょうがくせいのおんがく1」「精選しょうがくせいのおんがく1」に掲載された《きらきらぼし》の絵譜を比較検討する。

【絵譜の類別】 白抜き一段階名譜

【機能性】

【絵画性】

- | | |
|----------|----------------|
| ①五線：○ | ①色数：3～5色 |
| ②リズム：○ | ②絵譜：図19・20=36% |
| ③音価：○ | 図21=24% |
| ④音高：○ | ③挿絵：図19=31% |
| ⑤拍子・拍感：○ | 図20=29% |
| ⑥階名：有 | 図21=33% |
| | ④整合性：△ |
| | ⑤挿絵○ 絵譜× |

機能性重視の配色

図19では全小節、図20では1～8小節が、図21では反復箇所を省略した全8小節が、歌詞との整合性を保持した★型の白抜き一段階名譜で描かれている。3.3と同様に、挿絵の変更によりページ全体の雰囲気は変化しているが、記載内容に大幅な変更はない。絵譜中の★のモチーフの色や、黄色く色付けされた五線も挿絵の雰

囲気とは完全に切り離されており、絵譜自体の絵画性、ページ全体の絵画性は高いとはいえない。



図19：S42「新訂おんがく1ねん」



図20：S50「改訂新版しょうがくせいのおんがく1」

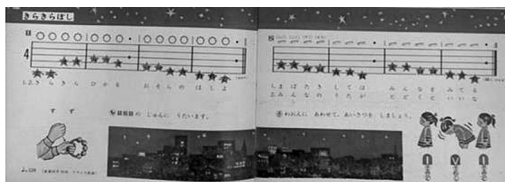


図21：S52「精選しょうがくせいのおんがく1」

4 結論

これらの分析結果より、当時の日本の教育者が絵譜に求めたものや絵譜に託した思い、それにとともなう変遷過程が確認できた。分析をとおして確認できた事項は以下の5点に集約できよう。

1：各社それぞれに独自性（図1・2参照）や類似性（図4・5・6参照）のある絵譜描出の創意工夫があったこと

2：五線譜に準ずる機能性を一つでも多く絵譜に盛り込もうとする姿勢（図17・18参照）

3：絵譜と五線譜の折衷過程（図2・11参照）

4：絵画性より機能性を向上させることが最優先事項であったということ（図10・15参照）

5：絵譜の絵画性の欠如は挿絵によって補完され、曲の情景や世界観を伝える挿絵との融合によって、紙面全体の絵画性が担保されていたこと（図13・17参照）

上記の事項からは、教材としての使命を果たそうとする立場と、絵画性を重視する立場とが拮抗しながら、日本の絵譜の歴史を形作っていたことが窺えよう。また、小学校の教材としての絵譜の役割は、さまざまな教育的ニーズに応じていくことが求められた。そのため、常に制約を伴うものであったと見なすこともできよう。これらの制約は、読譜指導を課さない幼児教育に目を転じてみることによって、解放されるのではないであろうか。

学童期では読譜指導が課せられるが、幼児期にはそれが求められない。つまり、絵譜の廃れた理由が読譜にあるとすれば、それを意識しない幼児期には効力を発揮するのではないか、という推論も成り立つ。

本稿における《きらきらぼし》の絵譜の比較分析をとおして、同一曲を絵譜で描いた際の描写方法の多様性に触れることができた。個々人の内面に有する歌の世界を表出する手段として、絵譜を自由に描くことによって、子どもとの歌の世界観の共有に役立つことが予想される。読譜のための情報を可能な範囲で包含させながらも、より歌の世界観を重視した絵譜の作成、そしてそれらの視覚的感受によって絵譜の作成者の豊かな内面世界を子どもたちが享受できることが可能になれば、絵譜の教材性は本来の真価を発揮するのではないであろうか。

最後に読譜教材としての制約から解放された絵譜の一例として、未来の保育を担う保育者養成課程に在籍する本学の学生が描いた《きらきらぼし》の絵譜を紹介する。この絵譜によって描出された豊かな音楽世界は、決して五線譜で

は表しきれないものであろう。これこそが絵譜の真価であり、幼児教育こそ絵譜の存在意義を実感できる領域なのではないであろうか。

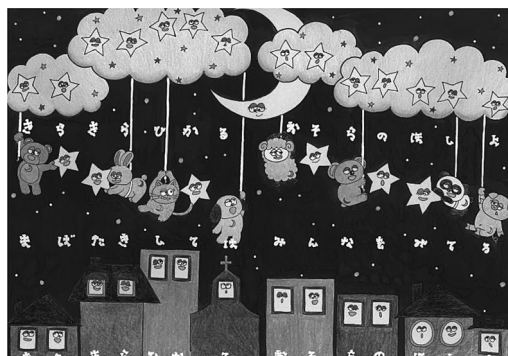


図22：佛教大学に在籍する保育者志望の学生の作品
《きらきらぼし》

〔引用文献〕

桜井富夫 (1961) 「読譜指導の背景としての絵譜」『教育音楽小学版』16(8), pp.26-27.

長谷川恭子 (2014) 「戦後の小学校音楽科教育における『絵譜』の変遷について」『実践女子大学生生活科学部紀要』第51号, pp.57~65.

〔教科書〕

大阪書籍 (1953) 「よいこのおんがく1ねん」

音楽教育図書 (1960) 「統合版たのしいおんがく1」

音楽教育図書 (1964) 「統合版たのしいおんがく1」

音楽教育図書 (1967) 「統合版たのしいおんがく1」

音楽之友社 (1955) 「新訂しょうがくせいのおんがく1」

音楽之友社 (1967) 「新訂おんがく1ねん」

音楽之友社 (1975) 「改訂新版しょうがくせいのおんがく1」

音楽之友社 (1977) 「精選しょうがくせいのおんがく1」

教育芸術社 (1952) 「一ねんせいのおんがく」

教育芸術社 (1955) 「おんがく1」

教育出版 (1953) 「小学生の音楽1」

教育出版 (1956) 「改訂しょうがくせいのおんがく1」

教育出版 (1958) 「総合しょうがくせいのおんがく1」

春陽堂教育出版 (1950) 「新訂あたらしいおんがく1ねん」

全音出版 (1955) 「一ねんせいのおんがく」

東京書籍 (1958) 「あたらしいしょうがくおんがく」

東京書籍 (1958) 「新編あたらしいおんがく1」

東京書籍 (1960) 「あたらしいおんがく1」

日本書籍株式会社 (1952) 「しょうがくおんがく1ねん」

二葉株式会社 (1959) 「音楽1年」

二葉株式会社 (1960) 「おんがく1年」

〔注〕

(1) 長谷川 (2014) は「絵譜」を、その形態と特徴に基づき、以下の7つの名称に分類している。

①挿絵高低譜：「挿絵の役割を持っているが、旋律の高低が表されているもの。階名や歌詞が書かれているものも含むが、五線のように本譜を連想するものは含まない。」

②五線絵譜：「五線（または五線を連想させる線）の上に、歌詞に合った絵（花や星など）で旋律の高低が示されたもの。絵を使っているが、本譜に近い様相であるもの。歌詞が絵の下に書いてある場合はあるが、絵の中に歌詞や階名は書かれていない。なお、ト音記号の有無は考慮に入れない。」

③かな絵譜：「絵または白抜きの丸の中に歌詞が書かれているもの。旋律の高低を表していないものは含まない。一線累加式、五線とも含む。五線になると、白抜きの音

符または普通の音符の中に歌詞が書かれている場合もある。」

④白抜き一段階名譜：「絵または白抜きの丸の中に階名が書かれているもの。旋律の高低を表しているもの。」

⑤白抜き一段累加式階名譜：「一線や三線のような様相に、絵や階名が書かれた白抜きの丸または白抜きの音符で旋律の高低が表されているもの。一曲の中で一線累加式から五線に至るようなものについては、この項目に含む。」

⑥白抜き五線階名譜（全曲）：「全曲をとおして五線の上に階名が書かれた白抜きの丸または白抜きの音符で旋律が書かれているもの。五線譜の形態で、音符の中に階名が書かれているものも含む。なお、ト音記号の有無は考慮に入れない。」

⑦：「白抜き五線階名譜（一部）」：五線の上に階名が書かれた白抜きの丸または白抜きの音符で旋律が書かれているが、前出の音には階名が書かれていないなど、全曲のうち一部だけであるもの。五線譜の形態で、音符の中に階名が書かれているものも含む。なお、ト音記号の有無は考慮に入れない。」

〔付記〕

本研究は、JSPS科学研究費補助金基盤研究(C) 課題番号：19K02667の助成を受けて行っている。

(うすい なお 教育学科)

